Bayreuth祝祭劇場創設時の座席

ある年のこと、正確には一九九四年の音楽祭（注：バイロイト音楽祭）の一日、幕間に友の会（注：バイロイト友の会）の事務所を覗いてみた。そこには、ある競売所の二階にあるコンサート会場で、当時は引退していたが、かつての名ワーグナー歌手K・リッダーブッシュ（彼のハンス ザックスは忘れ難い）がリサイタルを開くとの広告を眼にした。もちろん私はそのリサイタルに出掛けた。するとそこには第二の広告が並べてあった — 一八七六年、祝祭劇場の柿落しの際に使用された劇場客席の椅子百五十九脚を十月一日に競売に付する、というもの。そこで私はバイロイトの知人に頼んで、その一脚を入手した。現在それは私の書庫に鎮座している — 総木製籐張り型で、とくに幅が広くて大らかな風格がある。

新築早々の劇場にあった椅子であるから、ワーグナー御大の視界に度々入っていた筈である。さらに柿落しには各界の名士が多数出席していたので、もしかしたらこの椅子に近親のニーチェやリストやブルックナーは勿論のこと、グリークやサン＝サーンスやチャイコフスキーが坐ったかもしれない、のである。ワーグナーのパトロンだったバイエルン王ルードウィッヒ二世はゲネプロや三回目のリングに来ているから、彼もあるいはこの椅子に…と、妄想は果てしない。

ワーグネリアンとして、これを宝物としないで他に何があるか。これぞ正しく極上の宝物なのである。

（中略）

バイロイトの椅子は先述のように未だ家に置いてある。以前日本ワーグナー協会に寄贈を申し出たが、置き場所がないからと断られた。そこで代案を考えた。われこそは人後に落ちぬと自認するワーグネリアンに、代々継承して貰おうという訳である。そこでまず第二代として、友人でかつ元弟子のT氏を指名した。彼は晩年の適当なときに、第三代を見付けて手渡すことになっている。

以後同様で、この世の終りまで次々と継承される予定である。

亀淵迪「私の宝物」『窮理』22 (2022), pp.20–29より抜粋